



# IDIOTICA

---

阿呆物語

馬鹿編

---

湖南徹

---

## ジャパンレストラン

「へえ。こんなところにも和食レストランがあるのか」

と、僕は思わず呟いた。

店自体は現地の一般家屋を改装して飲食店に仕立てたらしく、日本らしさはない。『ジャパンレストラン』とカタカナと英語で記された看板がなかったら、和食レストランどころか、飲食店だとも思わなかつたらう。

最近はニューヨークでも、パリでも、地球の裏側でも和食レストランがある。日本食は健康にいい、という事で注目されているのは確かだが.....。

僕は入口のドアを横に引いた。

「イラッシャーイ。コンニチワ。ウェルカム」

と、訛りのある日本語で、店主が僕を迎えた。日系人ではなく、現地の者である。でっぴりと肥っていた。弾ける程の笑顔だ。和食とは全く縁のない者に見える。

何故こいつは和食レストランなんて開業しようと思いついたんだらう、と僕は首を傾げた。

店内も日本らしさはなかった。木製の丸テーブルが五つ並べてあるだけ。各テーブルに小さな日の丸の飾りがあった。それで『日本』を演出しているつもりらしい。

時間が早いので、ガラガラだ。

僕は一番奥のテーブルについた。椅子はがたついていて、ひっくり返らなかったのは奇跡である。

「ここ、ジャパニーズ・レストランかい？」

と、念の為訊いてみる。日本語で。

店主は、たどたどしい日本語で、

「そう。ジャパン・レストラン。美味しいよ。ベリ・グッドよ。ウンザリする程美味しいよ。死にたくなる程美味しいよ」

――死ぬ訳ないだろ。

店主は、僕をまじまじと眺めていたが、

「君、君、ジャパニーズ？」

――これまで何語を喋っていたと思う？

と、僕は答える代わりに、

「ああ、日本から来た」

「本物のジャパニーズのお客さん、初めて。来るとは思わなかった。ジャパン、ここから遠いからね。ウンザリする程遠い。死にたくなる程遠い」

僕もこんなところで日本食を食べる事になるとは思っていなかった。

「偶々見付けたんだ」

「嬉しいね。ハッピーね。ウンザリする程ハッピーね。死ぬ程ハッピーね。ジャパンの皆さんにここを教えてね。美味しい美味しい、て。ウンザリする程美味しい、死ぬ程美味しい、て」

――食い終えた後に検討しよう。

「メニューあるかい？」

「はい、これ。ちゃんと受け取ってね。ちゃんと受け取らないとぶん殴るよ」

――客を殴るな。全く、どこで日本語を習ったんだ？

僕は一枚の紙を二つ折りにしただけの粗末なメニューを見つめた。

親子丼、かば焼き、目玉焼き、魚焼き、卵焼き、うどん、キムチ...など、和食や、和食でないメニューが日本語と英語で表記されている。手書きだった。達筆とは言い難い。

「一目玉焼きをメニューに添えるとは。……卵焼きと何か違いがあるのか？ キムチなんてどこから仕入れたんだ？ うどんもあるのか……。」

「これ、主人が書いたの？」

「いや、息子。ジャパンで勉強。私のジャパン語、息子、教えてくれた。美味しい美味しいジャパン料理、色々教えてくれた。ウンザリする程美味しいジャパン料理、死ぬ程美味しいジャパン料理、教えてくれた。だからこの店開けた。大繁盛してるよ。朝も昼も夜もお客さんが列を作ってるよ。ウンザリする程美味しいからね。死ぬ程美味しいからね」

僕は店内を目立たぬ形で見回した。

客は僕だけだ。

一つのテーブルはかなり長い事使われていないらしく、埃だらけである。

「――本当に繁盛してるのか？」

「お陰でね、お金がたくさん入ってくるよ。使い切れない程入ってくるよ。死にたくなる程たくさん入ってくる。ウンザリする程入ってくる」

「――ウンザリするなら店を畳めよ。」

地球の裏側で和食を食べるのはおかしいと思いながらも、三週間振りの和食だ。

「じゃあ、かば焼きとご飯を」

「グッド・チョイス。今朝捕れたの使うね。待っててね。ウンザリする程美味しいよ。死ぬ程美味しいよ。ベリ・グッドよ。逃げたら殺すよ。ジョークじゃないよ」

「――客を脅すな。」

僕は、この店に入った事を後悔し始めた。

が、今更逃げ出す訳にもいかない。

—「どんな料理か検討も付かないが、食ったところで死にやしないだろう。

と、開き直すしかなかった。

—〇分後。湯気の立つ皿が二枚、目の前に置かれた。

「ハイ、かば焼き。美味しいよ。ウンザリする程美味しいよ。死ぬ程美味しいよ。美味しくなかったら殺すよ」

—「客を殺すな。

僕は二枚の皿を見つめた。予想していたのと全く違った。

一つの皿には白いご飯が盛られている。もう一つの皿には白っぽい塊の上に赤いソースがかけられてあった。

—「本当にかば焼きか？」

地域の人々の口に合うよう調理されているのだろうし、この辺りでたれのベースとなる醤油は販売していないだろうから、多少違って見えるのは仕方ない。

僕は匂いを嗅いだ。

変な臭いはしない。

これまで食べてきたかば焼きの匂いとは異なっていたが。

まあ、食べてみようと思い、一切れ口に放り込んだ。

「ん？」

不味くはないが、やはり歯触りが日本のかば焼きと全く違う。

僕は更に噛んだ。

歯応えがある。ウナギではなく、肉のようだ。

—「ウナギはこの辺りでは入手できないのか？ 肉で代用したらかば焼きじゃなくなるだろうが。何でかば焼き、て名付けたんだ？」

店長が、満面の笑みを浮かべながら、

「どう？ 美味しい？」

「美味しいよ」

「死ぬ程美味しい？」

——そこまで美味かねえよ。

「ウンザリする程美味しい？」

——ウンザリしたら美味しくない、て事だろ。

「美味しくなかったらぶん殴るよ」

——客を殴るな。

「美味しくなかったら殺すよ」

——客を脅すな。

「ま、まあ、美味しいけど…。これ、本当にかば焼きなの？」

「そう。かば焼き。今朝捕れたばかりのカバ、料理した。大変だったよ。カバ、物凄い危険な動物。怒りっぽい。ワニも噛み殺せる。ワニも危険だけど、カバの方がもっと危険」

「カバ？ カバを焼いたかば焼き？」

「そう。美味しい？ ウンザリする程美味しい？」

「美味しい、美味しい」

「死ぬ程美味しい？」

「美味しい、美味しい」

「美味しくなかったら殺すよ」

「美味しい、美味しい。だから殺さなくてもいい」

と、僕は言った。目玉焼きを注文しなかったのは正解だったな、と思いながら。

## 節約出来ない主婦は失格者？

恵美は、バリカン—WAHL社の89スーパーテーパー2—で、息子の良夫の頭を刈っていた。

「ママ、早くウ、早くウ」

と、5歳になる息子はぐずった。

「分かってるから、動かないで」

恵美は、89スーパーテーパー2を動かし続けた。

良夫は、ジッとしているのがとにかく苦手だった。一分間でも落ち着いて座ってられない。

幼稚園からも、「良夫君はとにかく落ち着きがないですねえ。我々としても困ってしまいますよ」と言われてしまった。

ここまで落ち着きがないのは、最近テレビで盛んに取り上げられている学習障害かな、と心配になって病院で診てもらった。

しかし、「学習障害ではないです。活発なだけです。子供には多かれ少なかれこうした事があるんです。お母さんは心配し過ぎですよ。……テレビで取り上げられていた？ ああいったつまらないテレビ番組を真に受けないように。大袈裟に取り上げているだけですから」と苦笑と共に突き放されてしまった。

「ママ、早く、早くウ」

「分かってる。だから動かないの」

恵美は、89スーパーテーパー2を動かす手を止めた。

一歩離れる。

「あーあ」

苦労して刈った息子の頭は、目茶目茶だった。

虎刈りである。

バリカンは、長さを調整して刈れるので、失敗はない筈。

まして、手にしているのはWAHL社の89スーパーテーパー2。

WAHL社は、NASAに宇宙飛行士用バリカンを開発・納入する程の技術力のあるメーカーである。その中でも、89スーパーテーパー2は理髪店が実際に使用する業務用。そこらに転がっている安物ではない。

ただ、対象者がジッとしていないと、業務用の高性能バリカンでもきちんと刈れないらしい。

一部――後頭部の左半分――は刈り過ぎ。前頭部の右側は全く刈れていなかった。

恵美は頭を抱えた。

このところ、夫晴男の給料はカットされ続けている。

節約しなければならない。

あるテレビ番組で観た「カリスマ節約主婦」は、「家族の散髪は必ず自分でやるように。床屋なんかに行っていたら節約なんて到底無理。節約出来ない主婦は失格者」と言っていた。

――何が何でも息子の頭を自分で刈らなければ。さもないと節約なんて無理。

……節約できない主婦は失格者……。

「ママ、もう終わり？」

と、良夫が椅子から半分下りた状態で訊く。

「終わりの訳がないでしょう、もう。ジッとしてなさい」

恵美は、息子を椅子に押し戻すと、89スーパーテーパー2を再調整した。より短く刈れるように、と。このバリカンは、刃を交換する事無く3ミリ程度まで調整出来るのだ。

89スーパーテーパー2を起動し、息子の頭に当てた。

良夫は、またぐずり始めた。

「ママ、早くウ、早くウ」

「分かってる！ だからジッとしてて！」

\* \* \*

恵美は、89スーパーテーパー2を止めると、また一步離れた。

虎刈りが一層酷くなっている。

禿げの部分と、髪の毛が残っている部分があり、サッカーボールの様だった。

——こんなんで本当に節約になるの？ バリカンをずっと使ってたら、電気代も馬鹿にならないし……。でも、今更床屋に連れて行ったら、バリカンの購入費——送料・税込みで一万二〇〇〇円——が無駄になる上、散髪代もかかってしまう。そうなったら、節約にならない。節約出来ない主婦は失格者……。

「ねえ、ママ、もう終わり？」

「終わりじゃない！ もう、大人しくして！」

恵美は、89スーパーテーパー2を再度調整し、起動させた。

良夫は、またぐずり始めた。

「ママ、ママ……」

\* \* \*

恵美は、89スーパーテーパー2を止めると、また一步離れた。

虎刈り状態は一向に解決されていない。

——あのカリスマ節約主婦は本当に家族の髪を自分で刈ってるの？　こんなに難しいなんて……。節約になってない。

……節約出来ない主婦は失格者……。

「ママ、ママ、痛いよ～」

「静かにしなさい。ジッとしてて」

恵美は、89スーパーテーパー2を再度調整し、起動させた。

良夫は、またぐずり始めた。

\* \* \*

恵美は、89スーパーテーパー2を止めると、また一步離れた。

虎刈りは相変わらずである。

良夫は、あまり動かなくなっていたので、問題なく刈れる筈だったが、バリカンというのは予想以上に腕を必要とするらしい。

——あのヘボカリスマ節約主婦め。嘘ついたんじゃない？　金が溜まったのは、節約からじゃなくて、テレビ出演料や印税じゃないの？　出演料や印税欲しさに、やってもいない、あるいは出来もしない節約術を堂々と述べている……。

恵美は首を振った。

そんな筈はない、と。

……節約出来ない主婦は失格者……。

「あーあ。またやらないと！　いい加減にしてよ！」

恵美は、89スーパーテーパー2を再度調整し、起動させた。  
良夫の頭部に89スーパーテーパー2を当てる。

\* \* \*

恵美は、89スーパーテーパー2を止めると、また一步離れた。  
まだまだら模様だ。  
まさか自分がバリカンすら扱えないとは……、とぼやいた。  
89スーパーテーパー2に眼をやる。  
刃にゴミの様なものがこびりついている。  
刃が綺麗でないときちんと刈れないらしい。  
恵美は洗面台で89スーパーテーパー2を綺麗に洗うと、再チャレンジする事にした。  
……節約出来ない主婦は失格者……。

\* \* \*

恵美は、89スーパーテーパー2を止めると、また一步離れた。  
虎刈り状態は解消していなかった。  
おかしい、と呟く。  
バリカンを綺麗にしたし、良夫は全く動いていない。  
にも拘らず、きちんと刈れていない。

「もお。何故ちゃんと刈れないの？ いい加減にしてよ！」

恵美は89スーパーテーパー2をまた洗うと、再度挑戦する事にした。

.....節約出来ない主婦は失格者.....。

\* \* \*

「ただいま」

と、玄関から夫の晴男の声がした。「飯は？」

「今は忙しいの！」

と、恵美は叫び返した。

「何やってるんだ？」

「良夫の頭を刈ってるの！ 全然上手く刈れなくて.....」

「ムキになってやるからだよ」

と、晴男は言いながら、リビングに入った。笑顔が消える。「.....お、お前、何やってるんだ」

恵美は血走った目で夫を睨み返した。

「だから、言ってるでしょ！ 良夫の頭を刈ってるの！」

「頭を刈る、て.....。文字通りやる事ないだろ！」

「仕方ないでしょ！ 上手く刈れないんだから！ グダグダ言っていると、あんたも刈るわよ！」

「そんな事言ってる場合か！」

「うるさい！」

恵美は、フル稼働の89スーパーテーパー2を手に、夫に襲い掛かった。

.....節約出来ない主婦は失格者.....。

\* \* \*

翌日。

晴男の会社の同僚が、晴男・恵美宅を訪れた。これまで一度も会社を休んだ事がない晴男のが無断欠勤を不審に思ったのだ。

その同僚は、夫と息子らしい肉体にバリカンを振るう血達磨の恵美を発見して、直ちに警察に通報。

警察は、バリカンで息子と夫の頭蓋骨を削り、脳まで刈って死に至らしめた、という事で、恵美を殺人罪で逮捕した。

恵美は、刑事らに連行されながら、ぼやいた。

――バランス良く刈れなかったばかりに.....。バリカンを扱うの、て予想以上に難しい。やはりプロに任せた方が.....。あーあ。結局散髪代がかかってしまう。節約に失敗した。節約出来なかった自分は失格者.....。

\* \* \*

テレビで取り上げられるようなつまらない節約術は信じないのが無難である。

特にストレスに苛まされている状態では。

## 自転車操業

俺は自転車に乗っていた。

ビアンキのRACING CAMOS 8900 XC。

オーダーメイドなので、90万円もした。24回払いのローンで購入したばかり。

そこらの自転車とは訳が違う。

最高の自転車だ、と俺は思った。

車道をサーッと移動する。

顔に当たる風が、心地良い。

……と、その時。

数十メートル先に歩行者がいるのに気付いた。

よぼよぼの、辛うじて生きている老人だ。

この道は、所々に歩道がない。そういう場合、歩行者は、車道の隅を歩かざるを得ない。

仕方ないと分かってはいるが、うざったい事には変わらない。

俺はペダルを全力で漕ぎ、とろい歩行者を追い越した。

とろい奴を追い越すのは気持ちいい。

俺はニヤリと笑った。

……と、その時。

背後から自転車が迫って来た。

ルイガノLGS-CT。

8万円もするツーリングバイクだ。

ルイガノは、俺をサーッと追い越した。

「ふざけるんじゃないねえ！」

俺は立腹した。

ルイガノは、バイクとしては安くないが、ビアンキの10分の1の価値しかない。

そんな安物に追い越される訳にはいかない。

俺はギアをシフトし、ペダルを懸命に漕いだ。

ルイガノに追い付く。

そしてサーッと追い越した。

俺はペダルを漕ぐ努力を止めなかった。ルイガノをぐんぐん引き離す。

「ふん。ざまあみろ！」

と、俺は吐き捨てた。

流石ビアンキ。そこらの自転車とは訳が違う。

とろい奴を追い越すのは気持ちいい。

……と、その時。

背後から車が迫ってきた。

トヨタのコンパクトカー。ヴィッツRS Sportyだ。

コストダウンの産物みたいなヘボ車に追い越されて堪るか、と俺は思い、ペダルを懸命に漕いだ。

ヴィッツRS Sportyの運転手は、俺の懸命な努力をあざ笑うかの様に、車を一気に加速させ、追い越した。

「ふざけるんじゃないねえ！」

と、俺は思わず口に出して叫んだ。

ペダルを漕ぐ足を、より速く動かす。

ビアンキはヴィッツRS Sportyに追い付き、追い越した。

俺はペダルを漕ぐ努力を止めなかった。ヴィッツRS Sportyをぐんぐん引き離す。

「ふん。ざまあみろ！」

と、俺は吐き捨てた。

流石ビアンキ。そこらの自動車とは訳が違う。

とろい奴を追い越すのは気持ちいい。

……と、その時。

背後からトラックが迫って来た。

三菱ふそうのスーパーグレート。

国内で最大クラスの大型輸送トラック。過積載しているのが見え見えだ。

うすらでかいだけのトラックに追い越されて堪るか、と俺は思い、ペダルを懸命に漕いだ。

スーパーグレートの運転手は、俺の懸命な努力をあざ笑うかの様に、トラックを一気に加速させ、追い越した。

「ふざけるんじゃねえ！」

と、俺は思わず口に出して叫んだ。

ペダルを漕ぐ足を、より速く動かす。

ビアンキはスーパーグレートに追い付き、追い越した。

俺はペダルを漕ぐ努力を止めなかった。スーパーグレートをぐんぐん引き離す。

「ふん。ざまあみろ！」

と、俺は吐き捨てた。

流石ビアンキ。そこらのトラックとは訳が違う。

とろい奴を追い越すのは気持ちいい。

……と、その時。

背後から新幹線が迫って来た。

歴代新幹線の中で一番格好いいにも拘らず、使い勝手の悪さで700系やN700系に主役の座を追われる事になった500系だ。16両編成だった。

なぜ新幹線が車道を最高速度の300キロで走っているのか分からなかったが、早々とお役ごめんとなった屑列車に追い越されて堪るか、と俺は思い、ペダルを懸命に漕いだ。

500系新幹線の運転手は、俺の懸命な努力をあざ笑うかの様に、列車を一気に加速させ、追い越した。

「ふざけるんじゃねえ！」

と、俺は思わず口に出して叫んだ。

ペダルを漕ぐ足を、より速く動かす。

ビアンキは500系新幹線に追い付き、追い越した。

俺はペダルを漕ぐ努力を止めなかった。500系新幹線をぐんぐん引き離す。

「ふん。ざまあみろ！」

と、俺は吐き捨てた。

流石ビアンキ。そこらの新幹線とは訳が違う。

とろい奴を追い越すのは気持ちいい。

……と、その時。

背後から旅客機が迫って来た。

エアバスA380。

世界最大の旅客機。全面2層化の客室と床下貨物室を有する。

なぜ全長73メートル、全幅80メートル、運用時重量276,800 kgにも及ぶ旅客機が車道を最大速度の時速1090キロで飛んでいるのか、分からない。

ただ、開発が遅れに遅れた旅客機ごときに追い越されて堪るか、と俺は思い、ペダルを懸命に漕いだ。

エアバスA380の操縦士は、俺の懸命な努力をあざ笑うかの様に、旅客機を一気に加速させ、追い越した。

「ふざけるんじゃねえ！」

と、俺は思わず口に出して叫んだ。

ペダルを漕ぐ足を、より速く動かす。

ビアンキはエアバスA380に追い付き、追い越した。

俺はペダルを漕ぐ努力を止めなかった。エアバスA380をぐんぐん引き離す。

「ふん。ざまあみろ！」

と、俺は吐き捨てた。

流石ビアンキ。そこらの旅客機とは訳が違う。

とろい奴を追い越すのは気持ちいい。

……と、その時。

背後からスペースシャトルのオービターが迫って来た。

エンデバー号だ。

爆発によって喪失したチャレンジャー号の代わりとして就役したスペースシャトル。実用5番機だ。

なぜ全長37メートル、全幅23メートルにも及ぶ宇宙船が、車道を最大速度の時速27875キロで飛んでいるのか、分からない。

ただ、爆発事故を立て続けに起こす屑みたいな宇宙船に追い越されて堪るか、と俺は思い、ペダルを懸命に漕いだ。

エンデバー号の操縦士は、俺の懸命な努力をあざ笑うかの様に、オービターを一気に加速させ、追い越した。

「ふざけるんじゃねえ！」

と、俺は思わず口に出して叫んだ。

ペダルを漕ぐ足を、より速く動かす。

ビアンキはエンデバー号に追い付き、追い越した。

俺はペダルを漕ぐ努力を止めなかった。エンデバー号をぐんぐん引き離す。

「ふん。ざまあみろ！」

と、俺は吐き捨てた。

流石ビアンキ。そこらのオービターとは訳が違う。

とろい奴を追い越すのは気持ちいい。

……と、その時。

俺とビアンキは摩擦熱により、燃え尽きた。

エンデバー号は耐熱タイルにより、燃えない様になっているが、人間である俺は耐熱処理など施されていない。ビアンキも同様だ。

燃え尽きるのは当然だった。

ビアンキは、ローンがまだまだ残っているというのに、灰となってしまった。

競争心を持つのは重要だが、ムキになってやり過ぎるのも駄目らしい。

人生、て難しいものである。

## 借金取立人の憂鬱

剛田と小塚は、築五〇〇〇年と思われるオンボロアパートのドアの前で足を止めた。

「ここですよね？」

と、小塚が訊く。

剛田は頷き、

「ああ。カスみたいなアパートだぜ。カスにはお似合いだ」

と言うと、口調をガラリと変え、「鈴木さーん、いるんでしょ？ ドアを開けてくださーい」

返事はなかった。

「鈴木さーん？」

やはり返事はない。

剛田はスチール製のドアを軽く叩いた。

「鈴木さーん、いるんでしょ？ 居留守しても無駄ですよ」

何の反応もない。

剛田は舌打ちした。ドアを若干強く叩く。

「鈴木さん、いるんでしょ？」

発言から、僅かながらも苛立ちが感じられる。

返事は全くなかった。

「もしかしたらいないんじゃないですか？ 反応が全くない」

と、小塚が言う。

「そんな訳ねえだろ！」

と、剛田はついに苛立ちを全く隠す事無く叫んだ。本性を現した、と言える。ドアに拳を思い切り打ち込み、「おい、鈴木、いるんだろ？ 愚図愚図してねえで、さっさと開けろ！ 返済を何ヶ月遅らせりゃ、済むんだ？」

やはり返事はない。

「畜生！」

と、剛田は叫ぶと、拳を再度ドアに打ち込んだ。ドアが、分解しても不思議ではない大音を立てる。

「中にいるんだろ！ 答えろ、糞野郎！」

「……答えられないよ。誰もいないんだから」

剛田は、小塚を睨んだ。

「てめえ、ふざけてるのか？」

小塚は慌てて首を左右に振った。

「わ、私は何も言ってません！」

「嘘つけ。誰もいない、て言ったじゃねえか」

「ですから、私は何も言ってません！」

と、小塚は唾を飛ばしながら叫んだ。

「嘘をつくなと言ってるだろうが！」

「……そいつは嘘なんかついてないよ」

剛田は訳が分からなくなった。小塚を睨んでいたのだから、彼が何も喋っていないのは分かったからだ。

「誰だ？」

「……俺だ」

と、ドアが言う。腕を組み、口をへの字に曲げていた。

剛田と小塚は、豆鉄砲を食らった鳩となって、ドアを見つめた。

「お、お前、喋れるのか？」

「ドアが喋ったらまずいのか？」

剛田と小塚は真剣に考えた。

ドアが喋ったらまずいのか？ 確かに、人間ではない。いや、生物ですらない。しかし、人間でないと喋られない、生物でないと喋られない、と誰が決めたのだろうか？

「い、いや、まずくはないが……」

「そうだよな。で、てめえらは中に人がいるか知りたいんだっただよな？ だから答えてやる。誰もいない、と」

「本当か？」

と、剛田は訊いた。

「俺が嘘つく奴に見えるか？」

と、ドアが睨み付ける。

ドアと喋った事があまりないので、嘘を言っているか、いないか、看破出来ない。

「特に見えないが……」

「じゃ、いいだろ。とっとと失せろ。うるせえんだよ。真昼間に盛りの付いた猫みたいにギャンギャン騒ぎやがって。アホか？」

剛田は、ドアと会話するのはおかしいと思いながらも、会話せずにはいられなかった。

「鈴木がどこに行ったか知らないか？」

ドアは腕を組んだ。

「俺はただのドアだからな。中にいる奴がどこへ行ったかなんて、興味ねえ」

確かに、玄関のドアが中の住民に興味を持っていたら気味が悪い。

「全く見当も付かない？」

「でかいバッグを抱えていたがな」

「でかいバッグ？」

剛田と小塚は、一瞬視線を合わせた。

ドアは頷き、

「ああ、見るからに夜逃げの様だったな」

「何故それを最初に教えない？」

「訊かなかったからだ。お前が何を求めているか、何故こっちが一々予想しなきゃならねえんだ？ 俺は単なるドアだけ」

確かに、ドアにあれこれ期待するのもおかしい。

「畜生！ 鈴木の子！」

と、剛田は叫んだ。

小塚が、

「ここでモタモタしていてもしょうがないです。奴の親戚や友人を当たりにしましょう」

「よし、そうするか」

と、剛田はその場を離れようとした。

「おい」

と、ドアが呼び止める。「ちょっと待て」

剛田は、ドアに向き直った。

「何だ？」

「謝れ」

剛田は、面食らって、

「謝る？ 何故？」

「てめえ、俺を殴っただろ」

「殴ってなんかいない」

「いや、俺を殴った。怒鳴りながらな」

剛田は頭を掻いた。

「え？ ああ。でも、あれは弾みで……」

「弾みも糞もねえよ。殴ったんだから、謝れ」

「何故ドアに謝らなきゃならねえんだよ？ そもそも、ドアは痛みなんか感じねえだろ。というか、ドアは普通喋らん」

「ドアが普通喋らないからといって、殴ってもいい訳じゃねえ。くどくど言ってねえで、謝れ。ゲス野郎め」

「ドアなんかに謝る訳ねえだろ！」

「そうか」

と、ドアは呟くと、剛田の顔面にストレートを浴びせた。

ドアはスチール製。拳もスチール製になる。

剛田は文字通り鋼鉄の拳を食らい、フラフラになった。

ドアは容赦しなかった。人間と違って、哀れみの感情はないのだ。ローキックを浴びせる。こちらもスチール製だ。

剛田は激痛に耐えられず、蹲った。

「ドアだからといって甘く見るんじゃないねえ、このゲス野郎」

「は、はい、分かりました。申し訳ございません。もう二度としません」

と、小塚が、悶絶寸前の剛田の代わりに陳謝すると、剛田を引きずりながらその場を離れた。

「イテテテテ」

と、ボロアパートから引きずり出された剛田が、呻き声を上げる。

小塚は、汗を拭いながら、

「大丈夫ですか？」

剛田は頷きながらぼやいた。

「ああ。畜生。返済者に夜逃げされるは、ドアにぶん殴られるは……。最近は取り立ても楽じゃねえ」

……そういう問題ではない。

## 雨男

——今日で何日目になる？ 二日？ 三日？ 関係ないか。

良夫は歩き続けた。

——来て良かった。

良夫は、自分は雨男なのか、とよく思った。そうではないと信じたかったが、過去を振り返ってみるとそう考えずにはいられない。

入学式。卒業式。遠足。運動会。修学旅行。大学祭……。

雨にならなかった方が珍しいくらいである。小さい頃、母にてるてる坊主の作り方を教わって、窓からぶら下げてみたが、効果は全くなかった。

社会人になっても、その状況は変わらなかった。傘を持って出なかった日は数えられる程しかない。会社の連中もそれに気づき始めたようで、彼が飲み会や花見や社内旅行に呼ばれる回数は減ってきている。

(雨男)

これも、家に閉じこもっているのが好きな者なら苦にならない。小雨だろうと、土砂降りだろうと、屋内に留まっていれば関係ないからだ。

残念ながら、良夫は旅行が好きだった。というか、他にこれといった趣味がない。営利目的の観光名所を訪れるのではなく、自分が住んでいる以外の町中をのんびりと歩くのが好きなのだ。

雨の中での街巡りも、偶には悪くないのだろうが、連日晴天に全く恵まれない街巡りを強いられるのは辛い。

そんな訳で、旅行中の雨は特に困る。しかし、傘を必要としなかった旅行は全くと言っていい程なかった。

(雨男)

自分をそんな風に捉えたくない。  
そんな風に思われたくない。  
では、どうすればいいのか。

(国内旅行だから駄目なのでは？ 海外はどうだ？)

という訳で、今回の海外旅行を企画した。これで雨が降ったら俺は完全に雨男だと。

\* \* \*

良夫は空を見上げた。  
雲一つなく広がる蒼い空。延々と続く、吸い込まれる様なブルー。  
雨が降る可能性はコンマー以下である。

――俺は雨男じゃなかったのか。良かった、良かった。

良夫は、北米大陸南西部に広がるモハービ砂漠を、極度の疲労と脱水症に悩まされながらヨロヨロとさまよい続けた。